

## 就学前児をもつ中国の母親の信念

——指導法に関する母親の信念、行動および子どもの認知能力の関係——

郭 小 蘭

はじめに：

子どもの発達にとって母親や家庭のあり方が極めて重要であることは心理学において早くから認識され、また実証的研究も数多くなされてきた。それらは、子どもの人格—社会特性の形成に対する母親や家庭の果たす役割を論じたり、実証しようとしたものがほとんどであった。しかし近年では子どもの情緒的適応やパーソナリティの面だけではなく、知的発達に対しても、幼少時の育て方、特に母親の態度、行動などの影響が大きいと指摘されるようになり実証されつつある。ところが、親の養育態度、行動などの違いをもたらす要因は何かという問題については、今まであまり注目されてこなかった。

親の行動を規定する要因はいろいろ考えられる。例えば親のおかれている状況や親の性格が要因として考えられる。さらに、親の子どもに関する認識や信念も行動を規定する要因であることが最近指摘されはじめた（Kelly, 小嶋, Sigel, etc.）。例えば、親は子どもが能動的に学習する能力をもっていてと考えていれば、できる限り子どもの自主性にまかせ、指示的な行動は少なくなるだろう。このように、親の信念がどのように子どもの発達に影響するかということは興味深いテーマである。このテーマについて、Ann V. McGilli Cuddy-De Lisiは次のように指摘した。子どもの発達に対する親の信念の影響について2つの可能性が考えられる。1つは、信念が行動を媒介して間接的に子どもの発達に影響することである。つまり親の信念が行動に現われ、さらにその行動が子どもの発達に影響することである。もう1つの可能性は、親の信念が親子の相互作用の中で直接に子どもの発達に影響することである。つまり、親の信念、価値観などが態度を通して子どもに伝わり影響することである。親子の相互作用を通して、子どもは親が何を考えているのか、あるいは自分にどのようにしてほしいのかがだんだんわかるようになる。高校生の場合について考えると、親の希望はおそらく子どもの入学意欲に影響するだろう。

親子関係において、親の信念がどのような働きをしているのかに関して、理論的に推測することは、子どもの

発達をより正確に理解するのに寄与するし、また、研究者の注目を集め始めている。

目的：

親の信念がどのように行動及び子どもの認知能力に関連しているのかは、まだ明らかにされていない。小嶋は親の信念に関する諸要因の相互的規定関係のモデルを提案したが、それが実際に成立するかどうかを検討してみたい。親の信念を規定する要因の1つとして、社会階層をあげることができるが、社会階層という要因が指導法に関する親の信念に関連するだろうか。従来、子どもの社会的な面の発達にのみ影響すると見なされてきた親のしつけ行動及び信念は、子どもの知的発達にも影響するだろうか。特にこれらの側面に関する情報があまり知られていない中国では、親の信念がどのように行動及び子どもの認知能力に関連しているのだろうか。以上、述べたことを明らかにしようとするのが本研究の目的である。特に中心となる目的は、次の2つに要約することができる。

- (1) 指導法に関する母親の信念は、どのように母親の行動及び子どもの認知能力に関連しているかを探ることである。
- (2) 社会階層が、母親の信念に関連しているかどうかを探ることである。

方法：

中国の就学前児（平均月齢66ヶ月）及びその母親を対象として研究を行った。子どもの認知能力は検査と実験によって測定し、母親の行動は質問紙調査、母親の信念は個別面接でしらべた。107人の子どもが本研究に参加した。彼らの母親のすべては質問紙調査に参加したが、時間の関係でその内の75人の母親が面接に参加した。

結果：

社会階層が母親の信念に関連することは見られなかった。また、母親の信念と行動及び子どもの認知能力は相互規定的関係であることをある程度明らかにすることができた。母親の信念と行動及び子どもの認知能力の関連を図1に示す。

結論：

本研究を行った結果、指導法に関する中国の母親の信

## 就学前児をもつ中国の母親の信念

念が解明され、さらに母親の信念が母親の行動及び子どもの認知能力に関連していることが明らかにされた。特に、従来、子どもの社会的な面の発達にのみ、関係すると見なされてきた母親の子どもに対する躰行動が、子どもの知的発達にも結び付くことがわかった。

まず、母親の信念について見てみよう。教える方略に関する母親の信念について主に次の2つの信念が見られた。1つは、子どもがまだ未熟であり、自分で考えたり、原理を理解することはできないので、単に、答えを記憶させるしか方法がないという信念である。この信念を“記憶重視型信念”と名付けた。この信念をもっている母親は子どもが有能な存在ではなく知識を受動的に受け取ることしかできないというように考えている。これに対して、もう1つの信念は、子どもが大人の援助のもとで、自分で考えて問題を発見することができ、また、そうすることによって、子どもの思考力または表象能力が高められるという信念である。この信念を“思考重視型信念”と名付けた。この信念をもっている母親は、子どもを有能な存在として認め、子供に自分で考えさせることが大切であると考えている。

また、統制する方略に関わる信念について、次の2つの信念が見られた。1つは、子どもがわがままであるため、強制的にやめさせたり、身体的罰を与えたりしなければ、ますます悪くなるという信念である。この信念を“身体的罰が効果的である信念”と名付けた。これに対して、もう1つの信念は、子どもにも大人と同じように理屈を理解する能力があるから、なぜそうすることがい

けないかを子どもに説明してやれば、子どもは自発的に自分の誤った行動をやめると信じる信念である。この信念を“因果説明方略が効果的である信念”と名付けた。

このように、母親の信念について、4つの型の信念が見出されたが、さらに、この4つの信念を2つの次元からとらえることにした。それは、“間接教授的信念”（記憶重視型—思考重視型）と“因果説明的信念”（身体的罰型—因果説明型）である。この2つの次元の信念は、どのように母親の行動に関連し、さらに子どもの認知能力に働きかけるのだろうか。

母親の信念が行動及び子どもの認知能力に関連していることが本研究では有意に見られた。まず教える方略に関する信念については、思考重視型教授がよいと考えている母親の方は、子どもに間接的に教えたり考えさせたりする行動がより多く見られた。さらにそれは、子どもの認知能力にプラスに関連していた。一方、記憶重視型教授がよいと考えている母親の方は、子どもに考えさせる行動が相対的に少なかった。さらに、それは、子どもの認知能力にマイナスに関連していた。そして、統制する方略に関する信念については、因果説明方略がよいと考えている母親の方は、因果関係または合理的証拠を述べることによって子どもを説得する行動がより多く見られ、同時に間接的に子どもに教える行動も多くみられた。さらに、このような信念や行動は子どもの認知能力にプラスに働きかけていることがわかった。このことは、就学前の教育において特に重視されるべきである。

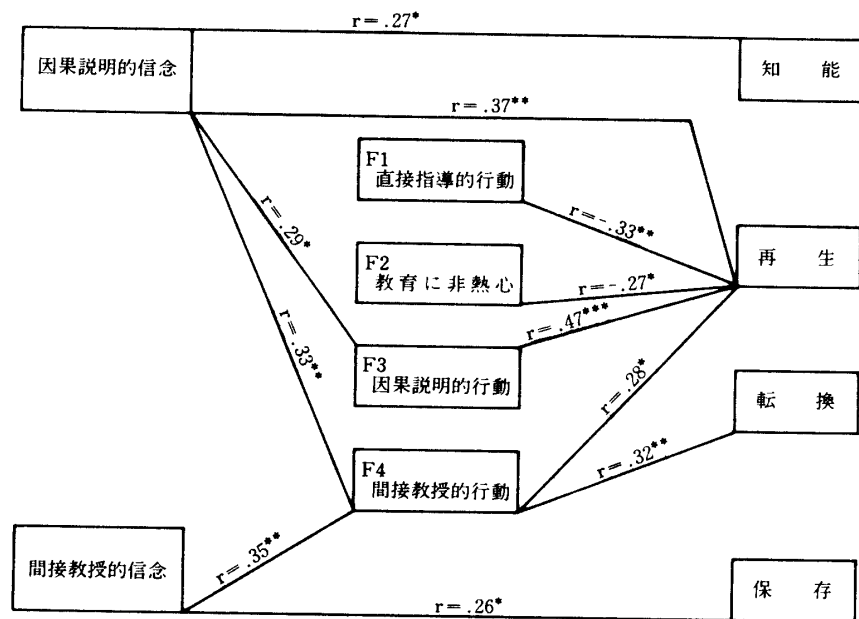


図1 母親の信念と行動及び子どもの認知能力の関連